

女性議員が増えるには

ジェンダーギャップ指数にみる女性の政治参画の遅れについて

世界経済フォーラムは2017年11月、男女格差の度合いを示す「ジェンダーギャップ指数」を明らかにした。日本は世界144カ国中114位だった。この指数は経済参画、政治参画、教育、健康の4分野の計14項目であり、男女平等の度合いが指数化され順位が決まる。ちなみに1位はアイスランド、主要先進諸国(G7)のなかではフランスがトップ(世界11位)で、日本は最下位である。

これほど日本が順位を下げているのは4分野の中の「政治参画」の指数が極端に悪いからである。内訳は「国会議員の男女比」「閣僚の男女比」「過去50年間の国家代表在任年数の男女比」である。「経済参画」のうち「幹部・管理職での男女比」も順位を下げた一因である。なお、「教育」「健康」の分野は世界平均を上回っている。

日本の女性閣僚の少なさ、女性首相の皆

無は一目瞭然であり、ここでは国会議員のジェンダー格差を見ておこう。列国議会同盟の昨年10月1日付の比較データによると、日本の世界ランキングは165位である。同年10月22日の衆院選の結果をそれに反映させても日本の衆議院の女性議員比率は10.1%で世界161位である。なお1位はアフリカのルワンダ(61.3%)、G7で日本は最下位だ。

政界における男女格差の要因を探ると、そもそも女性の社会進出が遅れていることがあげられる。女性の社会進出のハードルには、結婚、出産、育児、介護、男性の無理解があるとされる。これらの根本には性別役割分業の意識がある。男社会において女性は家庭を守るべきという意識が強い。これらを変えなければ女性の政治進出もおぼつかない。

女性議員の少なさのデメリットとして、女性の視点や感性が生かせないことがある。日本



やまくち ゆうじ
山口 裕司
宮崎公立大学人文学部教授

の「DV防止法(配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律)」「ストーカー行為等の規制等に関する法律」などは少ない女性議員が頑張って成立させた。もっと女性議員が多ければもっと早く実現していたかもしれない。あらゆる分野に多様な人材が存在することが望ましい。

世界で女性議員比率が高い諸国はクォータ(割り当て)制を導入しているようだ。比例代表選挙の名簿に女性枠を設けるなどである。日本の衆議院は小選挙区比例代表並立制である。そこで、比例区では各党が名簿に女性枠を設け、小選挙区ではイギリスのツイン方式(隣接する2つの選挙区をくくりとみなし、一方の選挙区で女性候補、もう一方の選挙区で男性候補をたてる方式)を導入し、各党が隣り合う選挙区をセットにして女性枠を設けることも、一案ではないかと思う。

Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

ジェンダー問題解決の
カギを提示する
最前線書誌情報誌



のぶた さよこ
信田 さよ子
原宿カウンセリングセンター所長



面前DVをめぐる新たな展開

家族内の暴力は同時多発的に生起しており、DV・児童虐待は包括的に援助しなければならない。しかし現状では、縦割り行政によって双方の援助者は分断されがちだった。2004年に、児童虐待防止法が改正され、子どもの面前でDVが行われることが心理的虐待にあたると明記されたが、具体的介入が行われたわけではなかった。その10年後、警察の対応が大きく変化した。面前DVという絶妙なネーミングで、その存在が可視化され、警察による児童相談所(以下、児相)への通告が積極的になされるようになった。2017年上半期警察庁まとめによれば、通報された18歳未満の子どもは初めて3万人を超え、その約70%が心理的虐待で、さらにその約70%を面前DVが占めている。これによって、児相が遅まきながらDV被害者支援との連携を模索し始め、被害女性のみならず子どもへの影響を視野に入れざるを得なくなったのである。まさに包括的支援に向けての強烈な後押しとなったのだ。

その一方で危惧すべき点も大きい。面前DVの責任を母親に負わせることで、DV被害女性を虐待加害者扱いする方向性が生まれつつあるのだ。警視庁の広報でもっと露骨に「子どもの目の前で夫婦喧嘩をするとよくない影響が」というキャンペーンとともに、母親が父親を殴っているイラストが掲載されている。DVということばを避けて夫婦ゲンカに変え、さらに母親のヒステリックな言動が原因という面を強調することで、「やっぱり母親次第だね」という従来の子育て論に収斂されることになる。妻が夫を殴る

イラストは他にも目にするし、メディアの報道も夫婦ゲンカを子どもに見せるのはよくないという主張を落とすところになっている。男性から女性への力関係の差を利用した暴力がDVという視点はいつのまにか抜け落ちているのではないか。その点に関しては注意深くウオッチングしていく必要がある。

面前DVが子どもの脳に影響を与え、正常な発達を妨げるという研究結果が注目を集めているが、DV被害母子を対象としたプログラムを実施した経験から、早期の適切なケアによって子どものトラウマ反応は十分回復しうらう。しかし両親への深い情緒的つながりによって、例外なく子どもたちはアンビバレンス(両立不能感)や混乱を経験し、基本的安定感を阻害されている。時には発達障害的な言動を呈することもある。これらの影響について知る必要があるのは、まず加害者だろう。加害者プログラム参加などによって被害者に対してDVの責任をとるよう促されるだけでなく、子どもへの影響を知り、どうすることが愛情なのかという具体的ななかかわり方を学習する必要がある。

このように面前DVによる子どもへの影響の深さに対する驚きが、被害者(多くの場合は母)・加害者(多くの場合は父)・子どもの三者を視野に入れたDVの包括的支援の必要性を再認識させたといってもいい。児相や民間心理相談機関、加害者プログラム実施団体、被害者支援団体などの幅広い連携が喫緊の課題だと考えている。

& MORE

テーマ「王子様を待たないで！」

トコ (コラムニスト/タレント)

女性と男性、もう立場は同じでしょ、というか、女性のほうが強くなってないかしら?なんて思わせられることが多いけど、そんなのウソウソ。

まだまだ女性は我慢を強いられているわ。結婚や育児で仕事を退職する、なんて選択は、もってのほかヨ。たとえば「あたしが働くから、あなた仕事辞めて子育てお願いね」と言ったら「なに言ったんだ、ふざけるな」と拒否されると思います。それっておかしくないですか?自分がやりたくないことをなぜ平気で女性に押し付けるのかしら?と不思議に思うべきなのよ。

トコは、16年間専業主婦でした。自分を見失い、イヤだったけど、自分で稼いでなかったから抜け出せなかった。ストレスで死にかけ、もういいや、エイヤッと離婚して、仕事を始めました。



- 女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと
- 西原 理恵子 著
- 角川書店
- 2017年初版
- 1,100円(税別)

そのまま家庭にいたら、仏頂面して人生を終えたと思います。それ以降、すべての女性の経済的自立を応援することはトコのライフワークです。

『女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと』を書いた西原理恵子さんは、自分の生活は自分で稼ぐ、をモットーにがむしやらに生きて来ました。うなずく部分ばかりだよ。もう仕事辞めちゃったし、なんてあきらめないで、今からでも遅くないわ。後悔しないために、自分の人生は自分で選んで、自分の足で歩きましょう。